

MENTAL NOTE

Hiroshi Munakata

人の気持ちは読めなくても
カードは当てられる
すべての手品師に

もくじ

まえがき _____ iv

‘TEMAKI’ Mind Reading _____ 1

The Triumphant Poker _____ 7

37+1 _____ 11

O.M.O. Force _____ 21

あとがきにかえて/私の戦略 _____ 26

まえがき

こんにちは。アマチュア奇術愛好家のムナカタ・ヒロシと申します。
本書は、マジックマーケット 2021 冬での発表を想定して書かれたメンタルマジックのレクチャーノートとなります。

ひとえにメンタルマジックと言えどその方向性やジャンルは多岐に渡りますが、本書に収録されているのは主にカードマジックであり、かつ人によってはあまりメンタルマジック然としていない印象を受け取られるかもしれません。言うなれば、演者が純然たるメンタル的雰囲気をもっており、かつとも演じられるトリックも収録されています。“マジック”寄りのメンタルマジックということです。

ただし内容には多少の癖があり、これは筆者の趣味を反映しています。手法に目を通してすぐに試せるというわけにはいきませんが、少しばかり凝った方法論は楽しんでいただけるかと思います。

1つ目のトリック『‘TEMAKI’ Mind Reading』は、本書の中では比較的演じやすい手順です。かつ最もメンタルらしいトリックでもあり、それ故に演技力も要求されますが、借りたデッキでも演じられるフットワークの軽さが長所です。

2つ目のトリック『The Triumphant Poker』は、ご存知の方にとっては馴染みのある古典的な数理原理を応用したもので、原理のポテンシャルを引き出した企みにご注目いただければ、と思います。

3つ目のトリック『37+1』は、本書において最も癖の強い手順です。文章で読んだだけでは混乱する方もいらっしゃるかもしれませんが、実際の演技は観客にとって決して複雑に見えない、とだけここでは言っておきましょう。いずれにせよ好みが分かれそうなトリックですが、筆者は今のところ非常に気に入っています。

4つ目はトリックというより特殊なフォースの方法論で、カードではなくビレットを用いるものです。これもやや凝った企みと言えるでしょう。

収録作すべてに共通して言えるのは、実際の観客の前で効果を確認したもののばかりだということです。どの手順もその労力（決して面倒な準備が必要だったりもしませんが）に見合った効果があるはずです。ですから気が向いたら、そして機会があったら実際に演じてみてください。この時代において動画越しに演じるのに極めて不向きな作品集を発表するのは、何も筆者の天邪鬼な性格から出たことではないのです。

——2021/10/11 いまだ人との接触が容易ではない時代に

TEMAKI’ Mind Reading

紹介

テンヨー社は、2013 年にプラスワンキャンペーン¹として『不思議な回り寿司』という作品を発表しました。この道具に付属する解説書には 3 つの手順が掲載されていますが、そのうち鈴木徹氏考案と記されている“どちらがお好き？”がたいへん巧妙にデザインされた手順で、解説を読みながら感銘を受けたことを覚えています。

ここで紹介する手順は“どちらがお好き？”の原理を拝借し、借りたデッキで演じられるように構成したものです。

準備

デッキが借りられる状況であればそのデッキを使っても良い。

最低でも 3 人ほどの観客が望ましい。

手法

——以下省略——

Tips/追記

——以下省略——

参考/雑感

何でもトランプという素材に置き換えてしまおうとするのは筆者のようなマジシャンの悪癖かもしれません。原案では「寿司ネタの好き嫌い」というパーソナルな要素を演技に取り入れることで、より感情に訴えかけるようなトリックを目指したのだそうです。このような原作者の意図——巧妙に秘匿されたスタックも併せ——を無視しているという自覚はあります。その代わり純粋な不思議さが強調されるトリックに仕上げようと思いました。

——以下省略——

The Triumphant Poker

紹介

こちらのトリックは、東北大学クロースアップマジック同好会関係者により 2017 年に上梓されたレクチャーノート『FIVE FLAVORS』の最後に収録されているものです。

特殊なルールで進行するポーカーゲームといった趣のトリックです。手札の内容が完全にフォースされているにも拘らず、観客の手によって自由に手札が設定されたと錯覚させるよう構築されています。

準備

——以下省略——

Tips/追記

手法の「②カードを示し、表裏を混ぜる」での手続きは単純化しても良いかもしれません。カードを配り、単に残りをひっくり返して重ねるというものです（こちらのほうが手続きとしては原案³に近い）。説明もシンプルに済むので、観客にパケットを手渡して行ってもらうことも可能でしょう。

参考/雑感

いわゆる Gilbreath's Principle⁴を筆者流に応用してみた手順で、記憶している限り、筆者が「作った」と呼べる水準のものとしては初めてのトリックです。

——以下省略——

37+1

紹介

観客と演者のカードを 1 枚ずつ決め、それらの数の大小によって勝ち負けを決めるゲームをします。観客の裁量によってカードが決定されますが、最終的には演者が勝ち、なおかつ演者はゲームの展開を最初から完璧に読んでいたことが明らかになります。

場合分けが多く、文章では複雑に感じるかもしれませんが、最終的に着地させたいゴールを理解できていれば演じる上で混乱はしないはずです。

準備

——以下省略——

手法

——以下省略——

Tips/追記

手法「③観客と演者のカードの決定」のパターン b において、選ばれなかった 2 枚のうち 1 枚をスイッチするために、上記の解説ではトップチェンジを用いることになっていますが、筆者が実際に用いている技法はこれとは異なるものです。詳細な解説は避けますが、Edward Marlo の“Visual Retention Change⁵”という技法を利用しています。このテクニックは複数枚のうちの 1 枚だけをスイッチするために利用すると、視覚的な錯覚が強くなります。

参考/雑感

あらかじめセットしておいた 5 枚のカードはいかようにもフォース可能ですが、お断りしておくと当然ながら様々な手法を検討しました。筆者の考えでは、ここの手法に凝ることでトリックの不思議さや魅力が増すことは特でない、という結論に至りました。

——以下省略——

O. M. O. Force

紹介

メンタルマジックの世界ではいわゆる「バラのフォース」と呼ばれるような策略が古典的に知られています。これは「花の名前」をコールしてもらうと大抵の場合「バラ」が挙がってくるというようなものです¹。しかしこのフォースはもちろん 100% 確実ではありません。

あるいは、「シンプルな図形」を何個か言ってもらえば、おそらく最初の 2 つのうちにはほぼ確実に「三角」が含まれるでしょう。

このように、「いくつか挙げてもらえば何番目かにはきっと含まれるであろう選択肢」に対して用いることのできる手法が、ここで紹介する O. M. O. Force です。

準備

メモ帳とペン。

手法

——以下省略——

Tips/追記

——以下省略——

参考/雑感

——以下省略——

ちなみに、O. M. O. とは Odd Man Out の略で、ここでは「仲間外れ」といったような意味です。

あとがきにかえて/私の戦略

メンタルマジックの表現の仕方はなかなか難しいものがあります。嘘くさくならず、馬鹿馬鹿しくならず、説得力ある演技を提示するためには極めて繊細なバランス感覚と勇気が要求されます。

すべてのマジックがそうなのですが、マジックの“現象”とは観客の頭の中でしか起こりません。メンタルマジックというジャンルは一際この性質が強い分野です。つまり観客の頭の中を操作すること——これがマジックの、そしてメンタルマジックの目指すゴールです。

しかし“カードを当てられた”ではなく“心を読まれた”と感じてもらい、“偶然”ではなく“演者を介した不思議な力が私の選択を左右した”と感じてもらうには、一体どうしたら良いのでしょうか。

さしあたってひとつの端的な回答は「演技力」となるでしょう。メンタルマジックの名手たちによる演技は、その優れた演技力で私たちを魅了します。鋭い眼光はこちらを見透かし、その一挙手一投足が普通の人々とは異なったオーラを放っています。

我々がこういったプロの真似をするにはどうしたら良いのでしょうか？

さしあたってひとつの端的な回答は「無理です」となります。無理です。我々はプロのように実践を通じて百戦錬磨の経験を得てきたわけではないですし、演技についてきちんと学んできた経験也没有ありません。ですからプロのメンタリストのようにはなれません（演技力を磨くため努力することは必要です）。それにアマチュアマジシャンが演技を披露する相手はたいいてい、自分にとって何らかの関係性を持った人であることがほとんどです。知り合いに対してプロのメンタリストみたいな振る舞いをしたら、おそらく誰もあなたに近付かなくなるでしょう。畏敬の念を抱いてか、呆れられてかは分かりませんが。

アマチュアマジシャンがメンタルマジックを適切に演じるにはどうすべきか、という問いの答えは、自ずと絞られてくるのではないかと思います。つまり普段の自分のペルソナを逸脱しないようにし、と同時に心を読むとかそういった能力のリアリティに気を配るということです。自分のことを「ある特定の条件下では頭の中が読めるだけのただの人」だと思ってください。自分はただの人であって、ですから観客を巻き込んで今から行おうとしているこの試みが成功するかどうか完璧に確信は持てていません。ちょっと不安げな表情をしつつ、成功したらほっと胸をなでおろし、喜びを表現してください。すべての人がもともと持っている（そしておそらく観客も持っている）他人に共感する能力を足掛かりにしましょう。観客がこちらに共感してくれれば、自ずと「心を読む」という行為も、何と

なく信じやすいものになります。「超人」的存在として自らをプロデュースしつつ観客の共感を利用しようとするのは、限られたプロのみ可能な極めて高いハードルです。

それよりは、普段の人間性を逸脱しすぎず、といってメンタルマジック的リアリティの水準もうまく保つことのできる匙加減が存在するはずなのです。そのラインを探りましょう。本書で言えば、『‘TEMAKI’ Mind Reading』あたりがそういった練習に適していると思います。

おまけ：Bullet Tells

この手順は特にメンタルマジック的というわけでもないし、失敗作なのですが、その試みにおいてはマニアを面白がらせることもあるでしょう。没ネタですからわざわざ紙面を割いて紹介するには忍びないものの、一度も陽の目を見ないうちに葬るのも惜しいということで、リンクだけ載せておきます。

また、なぜこれが失敗作なのか考えてみることは、奇術にまつわる思索を深めることにつながるかもしれません。



著 者 : ムナカタ・ヒロシ
発 行 : 東北大学クロマドウ会
印 刷 : ちょっ都製本工房

© 2021 Hiroshi Munakata